
東方蒼幻争

豆腐屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方蒼幻争

【Nコード】

N8207P

【作者名】

豆腐屋

【あらすじ】

少年は記憶と家族の為幻想の世界へと脚を踏み入れる。そこは人間、妖怪、神、悪魔などが共存する世界、幻想郷。主人公“牧野蒼也”は何を手に入れ何を失うのか……グロ描写は含みますがそんなに含みません。というかグロ描写は“いざ、幻想郷へ”ぐらいです。

牧野家の朝（前書き）

この小説には意味ワカンネ、といった要素を多く含んでいる可能性があります。

十分に注意をしまったりしながらお読みください。

あと、キャラ崩壊が著しいです。

ストーリー展開も光速です。

シャ 「豆腐屋の小説の展開の早さは化け物か」

豆腐屋 「初心者だからさ（初心者が皆そうだとはいくらぬ）」

牧野家の朝

(どうしたの?)

?」「…」

(なぜ泣いているの?)

?」「…ッ、ごめんね…まだこんなに小さいのに…」

(…泣かないで、僕は平気だから。ほら、顔を上げてよ。えーと、お姉さん?)

?」「…ええ、有難う。あなたは優しいのね」

(そう、かな?あまり考えたことなかった。)

?」「そうよ、その優しさ、大事にきなさい」

そして、またお姉さんは泣き始めた。

?」「じゃあね…また会える時を待っているわ」

(うん、またね…)

そして僕の目の前は真っ暗になった。

蒼也「ガハッ！…やってくれるじゃねエか」

で、着地地点にあった棚にダイブした。

ものすごい痛かった。

リビングのテーブルの上にはつまそつな料理が並んでいた。

姉「朝から元気だね」

蒼也「元氣なのが俺の取り柄の一つだ」

ちなみに、今日は洋食である。

その様々なおかず類の中に1つ、緑色に妖しく輝きを放つものが鎮座していた。

蒼也「てめエ…お呼びじゃねエぜ！」

姉「蒼也、まだピーマン食べれないの？子供だねえw」

姉ちゃんはモリモリとピーマンを食っていた。

蒼也「違う！こんなもの、この蒼也様にかかれば…」

数秒後、

蒼也「すいませんでした」

ちなみに今こんな感じ orz

姉「あきらめ早ッ！」

蒼也「しかたないだろ、嫌いなものは嫌いなんだ」

俺は隣に置いていたオムレツを食べていた。

なんか以上に甘い…

姉「まあ人それぞれって言うやつね。おっと、蒼也、学校」

俺は時計を見た。

蒼也「OH!MY GOD!」

ホームルーム開始まであと5分くらいだった。

蒼也「行つてきます！」

姉「ん、がんばれ」

俺は近くにあった鞆をつかm(ry

姉「それは私の」

間違えた。俺の鞆を引っ掴み家を飛び出した。

Good Morning and Run!! (前書き)

今回も意味不明な内容です。

もうスペルカード、

意味符「すつからかな内容」

とか使えそうなぐらいです。

それでも)・・(b<OKと言っ方はどぞ。

Good Morning and Run!!

牧野蒼也は走っていた。

人生という道を…とかいう理由ではなくただ学校に遅刻しそうだったからである。

蒼也「くそう、なにが楽しくて朝っぱらからこんなに走らなければならぬんだ…」

だがこの時間では走っても間に合うような距離ではない。

蒼也「しかしこの時間は人通りが少ない、というか皆無」

だれかに伝えるように行ってみた。

無論走りながらなので実は死にそうだ。

蒼也「つまり俺のこの能力を使用してもばれない、ということだ」

おっと、画面の前の君、なんのことかわからない、って顔してるな！？

よし、ご説明しよう。

能力と言っるのは分かるだろ？

俺の能力は“速度を操る程度の能力”だ。

大体10歳頃から使える。

しかし、みんなにはそのことを言っていない。

まあ、操るといってもそんなに変わるわけじゃないんだ。

50M走10秒台のやつが俺の能力を使うと5秒台になるってぐらい。

それぐらいの変化だ。

蒼也「だが今の俺にとっては有難い能力だ！」

そして、俺は能力を発動した。

景色が吹き飛ぶように後ろに流れていく。

蒼也「というのは比喻表現だ。実際はそんなに早くない」

俺が走っていると、人通りの少ないこの通りに人を発見した。

金髪で日傘を持ち、変わった服を着た人だ。

何というか、その、すごい綺麗な人だ。

俺がその人の横を通り過ぎようとした時だった。

？「ちよつといいかしら」

と声をかけられた。

俺は走るのをやめ、「いいですよ」的な事を言った。あ、能力も解除した。

正直学校が始まりそうになっているので少し焦っていた、というかケータイ見たらもう始まっていた。

蒼也（うん、もういいや…）

そしてその人が喋り始めた。

？「少しついて来てもらえるかしら？」

蒼也「あ、はい、いいですよ」

普通こんな時は断るものだろう。

しかし俺は違う。

俺ならおそらく車のドアから

「お母さん事故ったからちょっときてくれる？」

と言われても、

「はい、いいですよ」

と言って乗ってしまっただろう。

良く言えば優しさ、悪く言えば断る勇気がない。

そんなところだろう。

？「意外と素直なのね」

この場合、素直と言っのたろうか？

蒼也「ええ、素直なのが取り柄ですから」

もちろん元気なのも取り柄ですよ。

？「フフ…じゃあ行きましようか」

蒼也「どっこ」

「どこに？」の一言すら放つ時間が無かった。

それほどまでに驚いた、ということだろうか。

驚いたのは足下のせい。

俺の足下の地面がパカッと開き、穴ができた。

そして、俺は重力に逆らえずその穴に落ちて行った。

そして、頭上から、

？「1名様、ご案内」

という、楽しげな声が聞こえてきた。

Good Morning and Run!! (後書き)

豆腐屋「自分もご案内してよ」

紫「やだ」

豆腐屋「(´・`・´)(´・`・´)」

スキマ妖怪と牧野蒼也（前書き）

今回ストーリー展開が通常の3倍速です。

ええ、シヤ ザクです。

ボデイが赤色です。

パソコンはガチで赤色です。

スキマ妖怪と牧野蒼也

蒼也「おお W 落ちる落ちる」

?「あら、意外と落ち着いてるわね」

蒼也「そう見えます?」

?「ええ」

蒼也「なら見間違いですよ。実はかなり怖い」

というか怖くないはずがない。

かなり長い間落下してるんだぞ?

なんかお腹がヒューってする。

蒼也「で、目的地にはいつ着くんですか?」

?「私が境界を開かない限り永遠に着かないわね」

蒼也「マジか」

?「マジよ」

その時俺は悟った。

学校にはもういけないだろうと。

？「人聞きの悪いこと言うわねえ」

蒼也「心の中を読まないでください」

ちなみに、こんなに悠長に会話を繰り広げてはいるが、落下中だ。

蒼也「うお、ちょっと気分悪くなってきた」

？「それは少し大変ね。そろそろ開けましょうか」

そう言うと、落下していく先にさっきと同じような穴が開いた。

その穴に入っていく俺。

頭上からは、「じゃあねー」という声が聞こえてきた。

着地地点は椅子だった。

蒼也「…は？」

その椅子は学校の俺の席だった。

周りを見渡すと隣の女子がものすごい顔でこちらを見ていた。

その子だけではない。クラスの半分以上がこちらを見て同じような顔をしていた。

先生は運よく黒板に英文を書いている最中だったのでこちらを見ていなかった。

それと、さっきの女の人はいなくなっていた。

蒼也「（何だったんだ…今の？俺と同じ能力持ち…？）」

まあ能力持ち、というのは今命名したが、きっとそこに違いないだろう。

今度会ったら聞いてみよう。

とりあえず今は授業を受けよう…

そして、英語が終わった後の昼休み。

もう昼休み。なんかだいぶ長い時間あの穴（？）にいたらしい。

そして、俺の周りに生徒が集まってきて質問を投げかけてきた。

内容はもちろん、

「さっきのアレは何!?!」

というものだった。

自分でも判らなかつたので「W A K A R A N」と答えておいた。

てかそれで納得するこいつらもどつかと思つた。

その後、やる事が無くなつたので屋上に上つた。

俺はやる事が無くなるとよくここに来る。

特に誰もいないので凄く静かだ。

蒼也「だが、それがいい」

そう、それがいいのだ。

そしてこんなときに言つのもおかしいだろうが、俺には10歳位までの記憶が無い。

こうして一人でいると少しだけその事が紛れる気がするんだ。

？「随分と寂しい事言つのね」

蒼也「…もう驚かんど。そして心を読まないでくれ」

紫「あら、私は地霊殿の主と違ってそんなことできないわよ」

地霊殿って何だ。

というかこの人は何なんだ。

蒼也「少し聞きたいことが」

自分はくるりと振り返りながら喋った。

さっきまで背後から声がしていたから当然の行動である。

しかし、振り向いた先に女の人はいなかった。

蒼也「？」

辺りを探したがどこにもいない。

蒼也「どこ行っただらろ」

？「ここよ」

さっきの女の方が自分の腹から出てきた。

あ、少しグロい表現かも知らんがそうではないぞ。

俺の腹の少し前辺りに穴を開いてそこから上半身だけをのぞかせている。

蒼也「ナニヤツテンスカ？」

？「んゝ暇つぶし？」

女の方は穴から出て行き、その穴は閉じられた。

もちろん外傷は無い。

？「で、聞きたいことは」

蒼也「え？ああ、そう言えば名前聞いてなかったなー、と」

？「ああ、そう言えば言っただわね。私の名前は紫、八雲紫

よ

蒼也「紫…さん、ですね」

紫「そうよ。そしてもう一つ質問がありそうだから推理して言うわね。」

私の能力は“境界を操る程度の能力”よ」

蒼也「まあそれでしたけど、もう一ついいですか？」

紫「どうぞ」

蒼也「なんで俺を呼びとめたんですか？なにか理由があったんでしょ？」

なんとなく聞いてみたくなった。

ちなみに言おう。勘だ。

しかし、その質問をすると紫さんは少し悲しそうな顔をした。

BINGGOだったらしい。

蒼也「あ、言いたくないのならば言わなくてもいいです。誰にだってそう言う事の二つや三つはあるもんです」

紫「フフ…あなたは変わらないわね、蒼也」

蒼也「そう…ですか？」

頭痛が収まった後俺にはある変化が起きていた。

蒼也「…ッ」

紫「さて、あなたは何を“思い出した”のかしら」

蒼也「分かってるだろ、紫さん」

紫「ええ。今は幻想郷の記憶と私の記憶をほんの少しだけ思い出させたわ」

そう、かなり急なことだが…まあ俺も今思い出した。

俺は幻想郷に一度行ったことがある。

詳しくはまだ思い出せないが、確かに。

そしてこの人にも会ったことがある。

蒼也「で、ここに来たってことは俺を幻想郷に連れて行くってことか」

紫「ご名答。準備はいいかしら」

蒼也「いや、家族にも挨拶しないと」

紫「それは…無駄な行為だと思っわ」

蒼也「…？どづいづことだ」

紫さんはまた悲しそうな顔をした。

そしてゆっくりと喋った。

紫「あなたのお姉さん…死んだのよ」

蒼也「…は？」

風が木々を揺らしながら吹き抜けて行った。

スキマ妖怪と牧野蒼也（後書き）

はい、豆腐屋だ。

どうでしたか？

続きを呼んでくれる方は次のページえ。

いざ、幻想郷へ(前書き)

今回少しの間グロい文が出てきます。
覚悟してお読みください。

そんなにグロくないかもですが…

いざ、幻想郷へ

俺はその後学校を早退し、家へ帰った。

紫さんには、

紫「私は帰らないほうがいいと思うわ」

と言われたが、こればかりは「はい、そうですね」と言っているわけにもいかない。

姉が死んだといわれたんだぞ？

唯一の家族である姉が！

そんな話を聞いて「帰らないほうがいい」だって！？

それは無理つてもんだ。

蒼也「よし、着いた」

俺は今自宅前に来ていた。

そして、ドアを開けようと手をかけた時だ。

紫「本当に入るのね？」

紫さんが横に現れた。

蒼也「当り前でしようよ。確認しないと何にも始まらないですから」
紫「そう…なら心して入りなさい。多分こんな光景を見るのは初めてでしょうから」

蒼也「ああ」

こんな光景、と言う言葉が少し耳に残ったが気にしている暇はない。
俺は勢いよくドアを開いた。

そこに広がっていた光景は…

蒼也「何も無い…」

何もかもが無くなっている、と言う意味合いではない。

何も変化が無い、という意味だ。

蒼也「なんだ、何も無いじゃないか」

少し安心した。

蒼也「姉ちゃん、ただいま」

姉からの返事は無い。

少し不思議に思い、俺はそのままリビングへと向かう。

リビングに入った俺は何も理解できていなかった。

リビングが赤くなっていた。

壁紙が赤色、とか言う理由ではなく、部屋全体が赤黒く…

蒼也「何だよこれ…ん？」

俺は脚に違和感を感じたので足下を見た。

まあ、人として普通の判断だったと思う。

だがこの時ほど普通の判断を悔やんだ事はなかったと思う。

俺の脚が60cmくらいの何かを踏んでいた。

その片側は噛み千切られたように切れ、もう片側は5本に分かれている。

それはまるで…

蒼也「腕…？」

そう、それは見るからに腕だった。

しかし、胴体からは外れてしまっている。

脚が動くたびにその踏んでいる腕がニチャ…と嫌な音を立てる。

蒼也「うっ…！」

俺はリビングの様子に気づき、少し吐きそうになってしまった。

カーテンに飛び散った血や肉片。

そこらへんに散らばっている腕、脚。

辺り一面に敷き詰められている臓物の絨毯。

そして、まるで置物のようにテーブルに置かれている姉の首。

その表情は苦痛に歪んでいる。

そしてどこからともなく紫さんが現れる。

紫「だから言ったでしょう？帰らないほうがいいと。それでも入るなら心して入りなさい、と」

蒼也「…」

紫「大丈夫？」

蒼也「ああ。…なあ、紫さん」

紫「何かしら」

蒼也「これやった犯人、分かるか」

紫「それがわかるからあなたを呼びに来たのよ」

蒼也「俺を？」

紫「そう。今から言うことをよく聞いて」

そして紫さんは語りだした。

紫「まず、これをやった犯人は一人ではなく複数人よ。あれを人と呼んでいいかは分からないけど…」

そして、それをやった犯人は今幻想郷に侵攻、攻撃しているわ」

蒼也「幻想郷を？どうやって入った？あそこは普通では入れないはずでは？」

紫「ええ、まず普通ではありえないわ。そして今でも原因は分かっていないの」

蒼也「そしてそれを殲滅するために俺を？俺はそんなに強くないぞ」

紫「しかし、幻想郷の戦力は着実に減っていつている。戦力が足りないのよ。」

少しでも戦える人は呼ばなければいけない状況なの」

蒼也「で、俺のところに来たのか」

紫「ええ。そしてもう何人が外界から来てもらっているわ。」

そしてこうしている間にもお姉さんを殺した犯人は幻想郷を侵略している」

蒼也「こうしてる場合じゃない。すぐにも幻想郷へ行こう。」

紫さん、姉ちゃんを頼みます」

紫「ええ、もちろん」

紫さんが能力を使い姉だったものを境界へ入れた。

リビングは血こそ飛び散ってはいるもののさつきよりはマシな状態になった。

そして紫さんが別の境界を開いた。

幻想郷へと通じる境界。

蒼也「俺はこの世界に戻ってこれるのかな」

紫「それは分からないわ。あなた次第ね」

蒼也「そうか。…じゃあな、俺が生きた世界」

俺はそう言い残しこの世界から旅立った。

幻想が生きる世界、幻想郷へと…

いざ、幻想郷へ(後書き)

次回から幻想郷突入です。
お楽しみに。

博麗編00話「神社発見」(前書き)

今回かなり短いです。

博麗編00話「神社発見」

蒼也「幻想郷…懐かしいな。ほとんど記憶ないけど」

蒼也は紫の能力により幻想郷に来ていた。

しかし、その紫は「ちょっと用事があるからまた後でね」と言い残しどこかへ消えてしまった。

蒼也「まったく、どんだけフリーダムなんだよ…」

蒼也が愚痴りながら歩いていると少しの異変に気付いた。

蒼也「地面が抉れてる所があるな」

そう、地面の所々にポツカリと穴が開いている。

「これが今回の異変か」とあまり気にせず歩いていると階段を発見した。

蒼也「隣に名前が書いてあるな…博麗神社、か。覚えてねえな」

とりあえず蒼也はその階段を登ってみることにした。

博麗編、開幕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8207p/>

東方蒼幻争

2011年1月4日02時08分発行